

得る資料とも見るべきであらう。ともかくも紛れもない唐代の作品として、めづらしくもかゝる情景を、しかも特徴のある描法で畫いたこの畫面の今日に存することは、大なる幸慶としなければならぬ。

(ミューゼウム Museum, No. 2. May. 1951.)

外蒙古におけるコズロフ氏の發掘

一

こゝに外蒙古におけるコズロフ氏の發掘といふのは、一九二三年以來、五回のアジア探検に出かけたコズロフ氏の一隊が、一昨々年の三月から一昨年(一九二四年)の二月にかけて外蒙古庫倫の北方に當る地で、古代のふん墓を發掘した事業を指すのであつて、探検隊がロシアに引あげた當時、わが國の一二の新聞にも簡單ながらこれに關する報道のあつたことを記憶する。私は昨冬十一月にロンドンのイエッツ氏から、同氏が雑誌「バーリントン・マガジン」の同年四月號に載せた「コズロフ探検隊の發見」と題した論文の別刷の寄贈を受けたが、これが自分にはこの事業をやゝ委しく報ぜられたはじめであつた。随分時間のかゝつた消息であるが、今日の國際事情の上から、何とも致方ない次第である。イエッツ氏の論文は、一昨年レニングラードの學士院で發行されたコズロフ氏の報告に基づいて、そのうち主として美術の歴史に關係ある方面の記事を譯出し、かつ氏の意見を加へたものであるが、特に遺物に對する見解については、この道の權威として認めらるゝミンス氏の指導に負ふ所多き旨を記してゐる。今この譯文の中